「ランブール兄弟『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』と中世世界」

酒　井　理　恵

本論は、15世紀初頭のフランスにおいて、ベリー候ジャンの依頼でランブール兄弟が手がけた『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』を通して中世世界の一端を明らかにすることを目的としている。特に当時の人々の生活を風俗画という観点で見つめ、民衆画で知られるブリューゲルとの比較をしながら共通点と相違点を挙げる。また、≪エジプトへの脱出≫にみられる農民の持つ意味を考え、既往の研究を参考にし、独自の考察を加えて、『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』特有の風俗性を見出すことも目指す。

本論は３章構成となっており、１章では日本と海外においてなされてきた既往の研究について、研究史を追い、月暦や制作者といったカテゴリーに分けて述べた。

本論の２章では『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』を概説しながら、依頼主のベリー候と制作者のランブール兄弟の親しい関係について確認した。1411年１月１日に贋物の時祷書を贈り、ベリー候が褒美を授けたという逸話を契機として、ランブール兄弟は画家としての力と気の利いた機転でベリー候とのつながりが深くなったことが木島俊介氏らによっても考えられてきた。論者はそのような恵まれた環境が空気遠近法のような技法を発展させるきっかけを与え、ひいては現在も多くの人に国際ゴシック様式の最もすばらしいものと評価されるようになったのではないかと考えた。

今回最も大きな研究課題は、『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』のジャンルに関して、風俗画的要素が大きいという論者の考えを提示することである。これまでの研究では風景画か風俗画かという議論が等閑に付されてきているにも関わらず、風景画とする見方が多かった。しかしながら、論者はそうした従来の見解の傾向に対して、『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』の中に認められる≪エジプトへの脱出≫の例に着目して、それが風俗画として要素を持つことを３章で検証した。≪エジプトへの脱出≫は論者が作成した風俗画的視点から見た表の作品番号57にあたり、図版の下部に穀物の収穫をしている人物が描かれている。この図は聖書中にあるヘロデを避けてエジプトへと逃避する場面を描いていると思われる。しかし、聖書には穀物の収穫をしている人や農民について一切書かれておらず、この時祷書以前に同モチーフを描いた美術作品では穀物の収穫をしている農民が絵画的役割を持って登場するものはみられない。また、服飾という風俗的な面に目を向けるとその人物は月暦３月や10月に描かれる農民となんら変わりないため、キリストが生きた時代の話である聖書の描写にしては違和感を覚えた。論者はこれを『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』≪エジプトへの脱出≫の図に風俗的な内容が挿入されたことの裏づけとなるものと考えた。

論者は、これらのことを総合的に考えた結果、「14世紀当時の農民」を描きこんだのは、この図の制作者が、制作した年代の農民に対して少なからず関心があったからだと推察する。月暦図における農民を描いているうち、画家が仕えていたベリー候という貴族・王族だけでなくそれよりも下層の人たちに惹かれていったのではなかろうか。そのため、農民が登場する逸話を盛り込んだのではないのか、と推察されるのである。月暦を描くうちランブール兄弟が農民に関心を持ち、作品の随所にそれを生かすことは十分に考えられるのではないだろうか。この時代の画家の農民への関心が、月暦部の図だけでなく≪エジプトへの脱出≫というテーマの図に表れた例として方向付けたい。また、風俗画に関しては、風俗画として独立した主題を「風俗画的視点から見た表」において定量的分析をすることで確認することもできた。論者が作成した表において、独立したひとつの主題をもち、明確に風俗画といえるものは月暦図の11ページ分だが、一部主題を含んでいるものの、全体としては曖昧になっており、それは風俗画の成立過程にあり、風俗的要素が次第に濃厚になっていく独立の先駆け的存在としての見解を深めるものである。ただし、風景画と風俗画は互いに相反するものではなく、着眼点の違いによって分けられるものである。よって、たとえ同じ絵画作品であってもその中に風俗画の特徴と風景画の特徴を併せ持つことがあり、『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』における特徴の一つといえるのではないだろうか。

本論考において最終的には、時祷書に認められる風景表現と同じく風俗表現も、美術の歴史において、時期的に早いということが分かった。また、風景表現ではなく風俗表現に目を向けたからこそ中世の人の生活が見えてきたことを結論付けた。